
魔法少女まどか マギカブレイヴ

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカブレイヴ

【NNコード】

N6818W

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

地球リセットを救うため、砲台の引き金となつた馬神ダン。だが
彼は死んでいなかつた。マギサの導きで一人の少女の願いを叶える
ためにダンの新たな戦いは始まろうとしていた。

バトルスピリッツブレイヴとまどか マギカのクロスです。

第1話ダンの新たな戦い（前書き）

バトスピとまじか マギカのクロスです。バトスピは最終回後の話となりますね。

第1話ダンの新たな戦い

『…………きて、起きて……』

(懐かしい声。この声は……)

『ダン、起きて……貴方はまだ死んではいけない』

(マギサ?俺はグラソロロにいるのか?)

『いいえ、貴方がいる場所は貴方がいた地球とは別の場所、まだ目覚めていない貴方の頭の中に呼びかけているの』

(俺がいた地球とは別の地球?どうしたことだ?地球リセットは回避できたのか?)

『ええ、貴方の力と私の力で……そして貴方は消滅するはずの運命だったわ。けど、一人の少女の願いが貴方をこうして消滅せずに生きて行けるようにしたの。』

(願い?俺に一体何をさせようとしているんだ?)

『それは貴方が自分で見つけるのよ。ダン。ただ言えることは貴方なら彼女を救うことが出来る。それだけ……』

ダンが目覚めた場所はどこかの地下駐車場だった。そして手には未
来で手に入れたバトルスピリットの「テッキ」。その中には十一富×レ
ア全てが入っていた。

「テッキがある。けど、俺を呼んだ少女は……」

ダンは自分が成すべきことを見つけるために歩き出すのだった。

?

ダンはしばらく歩いていると奇妙な空間に迷い込んだ。

「…………」

「…………か」

ダンはどこからとも無く声が聞こえ、声が聞こえた場所に向かつた。
そしてたどり着いた先には……

「ねえ、なんなのよ。『』の化物は……」

「誰か……助けて……」

一人の少女を囲むヒゲを生やした怪物。

「何だ？あの生き物は。スピリットでも魔族でもない。」

ダンは少女たちを助けようとした。だが、今の自分に彼女たちを助ける力がないことに気がついた。

「くつ、どうすれば……」

すると持っていた『テッキ』が突然光りだし、ダンは『テッキ』から一枚のカードを取り出した。そして引いたカードは……

「……そうか、戦ってくれるんだな。太陽よ。炎を纏いて龍となれ。
太陽龍ジークアポロドラゴン召喚」

カードから赤い龍が飛び出し、ダンはバトルスタイルにチエンジした。そしてジークアポロドラゴンは少女たちの前に向かつた。

『グルルルルルル』

「な、何？』のドラゴンは……」

青い髪の少女がジークアポロドラゴンの姿を見て怯えた。するとヒ

ゲの生き物は一斉にジークアポロドラゴンに襲いかかつた。だが、ジークアポロドラゴンは尻尾で軽くヒゲの生き物をなぎ倒した。

「す、すごい。」

ピンク色の髪の少女がジークアポロドラゴンの強さに呆然としていた。するとヒゲの生き物が一人に襲いかかつてきだ。ダンは咄嗟に駆け寄り、一人をかばつた。

「「きやあ」」

「くつ、大丈夫か」

ダンはヒゲの生き物の攻撃を喰らつて、胸に輝くコアを一つ失つた。

(「この空間ではバトルフィールドと同じよう」「ダメージを食らうとコアが減るのか。）

ジークアポロドラゴンの猛攻はヒゲの生き物たちを直ぐに一掃するほどであった。そしてヒゲの生き物が全て消えると奇妙な空間が消え、ジークアポロドラゴンも姿を消した。

「一体アイツらは……」

ふつとダンは少女たちの方を見ると、少女たちはまだボオーとしていた。

「大丈夫か？」

「あ、はい。」

「あ、ありがとうございます。」

一人の少女はダンに向かってお礼を言つた。ダンはピンク色の髪の少女が抱きかかえるものに気がついた。

「なあ、それは……」

「え、あの、この子は……」

「その子はキュウベえ、私の友達よ」

ダンたちの前に金髪の少女が現れた。金髪の少女はダンたちに微笑むと……

「私は田川アリ。それこじしてもすごい力ね。貴方は一体何者かしら?」

「俺は馬神ダン。」

「鹿田まどかです」

「美樹さやかです」

ダンたちは互いに自己紹介をする。するとまどかが抱いていた生物が田を覚ました。

「せ、あ、アリ。」

「おはようキュウベえ。」

「マリエキュウベぇと呼ばれる生物はダンを見た。

「鹿目まどか。美樹さやか。突然だけど、僕と契約して魔法少女になつてほしんだ。」

こつしてダンの新たな戦いは始まるのであつた。

第2話 タンの新しい出発（前書き）

第2話です。今回は前回の続きから始まります。

第2話 ダンの新しい出来事

ダンはキュウベえが自分のことを知ることに不思議そうに金髪の女の子に聞いてみた。

「君はいつたい…」

「私は[アマ][アマ]、見滝原中の3年生。そして、キュウベえと契約した魔法少女よ」

「あの…魔法少女って？」

青髪の女の子が疑問をいだきつつ質問をした。

「そのことに関して私の家に来て……貴方もよ馬神ダン」

「ああ、俺も色々と詳しく聞きたい」

三人はその場を後にするのであったが、ダンを見つめる一人の少女がそこにいた。

「あれが……新たな来訪者。この世界はいつもと違うようね。」

3人はマミの家を案内され家に着いた。

「あ、入つて」

「「おじやまします」」

「ああ」

マミに誘われ、4人はマミの家に入った。

「素敵なお部屋…」

女の子2人は部屋の中を見て驚いた。

「一人暮らしだから遠慮しないで」

「一人で暮らしてるのか?」

「ええ。ちよつとお茶いれるから待つてて」

「「はい」」

「ああ」

「マミが紅茶の用意をしにキッチンへと向かい、三人はテーブルに座ると2人の女の子がダンに問いかけた。

「まだ私たちの自己紹介してませんでしたね。私は鹿田まどかです。」

「あたしは美樹さやか。まどかとはクラスメイトです」

「……馬神ダンだ。」

「せつときは助けていただきありがとうございます。」

「まどかは丁寧にお礼を言つとダンは微笑みながら……

「あれは……無我夢中でやつたからな。もしもジークアポロドーラゴンが来てくれるなかつたら、君たちを助けられなかつた。」

「いやいや、それでもあのカッコイイドーラゴンは凄かつたよね。まどか」

「は、はい。怖そつだつたけど、」

「あれは俺の大切なカードだからな。」

三人が話しているとマミが紅茶を持ってきた。

「キュウべえに選ばれた以上、あなたたちも人事じゃないものね。ある程度の説明は必要かと……」

「……その前にキュウべえ。一つ聞いていいか?」

「なんだい？」

ソファーの上で座っているキュウベえを見つめるダン。するとダンは……

「俺は誰かが俺を呼んだって、ある人物から聞いたんだ。それは……お前か？」

「ふむ、興味深い話だね。だけど君のことは僕は呼んだりはしてないよ。ただ、僕は君に宿る力については知ってる。」

「……………そつか」

ダンは再び黙り込んだ。まどかはそんなダンの様子を見て少し不思議に思った。

（何だかダンさん。クールな感じがするなあ～）

話は少しずれたので、マミが話を戻すため、三人にあるものを見せた。それは小さな宝石みたいなものだった。

「うわあ、綺麗」

「それは？」

「これはソウルジュム、キュウベえが契約した女の子に『えられる宝石。魔力の源であり、魔法少女だってことの証よ』

「契約つて？」

とさやかの言葉にキュウベえが答えた。

「僕は君たちの願い事をなんでもかなえてあげる

「えー? ほんと?」

「願い事って?」

「何だつて構わない。どんな奇跡だつておこしてあげられるよ

「金銀財宝とか、不老不死とか、満漢全席とか! ?」

「いや、最後のは…」

「でも、それと引き換えにできあがるのがソウルジエム、これを手にしたものは魔女と戦う指名が与えられるんだ」

「魔女…?」

キュウベえの言葉を聞いて、ダンはさつき戦った化物について思い出した。

「さつき倒した奴らがそつなのか?」

「いいえ、違うわ。あれは魔女の手下。魔女を倒さない限り手下は再び人を襲つわ。」

「…………なるほどな。」

ダンはマリの説明を聞き理解するとやがてやかましくユベに魔女の事を聞いた。

「それで魔女ってなんなの？魔法少女とは違うの？」

「願いからうまれるのが魔法少女なら魔女は呪いからうまれた存在なんだ。魔法少女が希望をまきちらすように魔女は絶望をまきちらす。しかも普通の人間には見えないからたちが悪い。」

「理由がはっきりしない自殺や殺人事件などかなりの確立で魔女が原因なの。」

「そんなやばいやつらがいるのになんで誰も気づかないの？」

「魔女はほつねに結界の奥に隠れひそんでるからね」

マリたちが話している時、ダンは何かの気配に気がつき、窓から外を見るとマンションの前にじっとして部屋を見つめる黒髪の少女の姿を発見した。

(あれは……誰だ?)

少女は何だか悲しそうな表情をしていたが、ダンがこっちを見ているのに気が付き直ぐに立ち去った。

(一体何者だったんだ?)

「あの、ダンさん?どうかしたんですか?」

険しい表情をしていたダンにまどかは心配そうに話しかけた。

「いや、別に……」

「じゃあ、少しいいかしら? ダンわん。」

マリはさつまつ微笑むと、ダンはマリが何を言いたいか直ぐに理解した。

「ああ、そうだな。君たちには見せたほうがいいな。バトルスピリツトを……」

ダンはさつまつポケットから自分のテックを見せた。さやかはカードに描かれたスピリットを見て興奮していた。

「凄い、カッコイイ奴がいっぱいだ」

「このカード色が全部違うのね。全部で6種類かしら?」

不思議そつに見るマリ。だけどまどかに至っては少し違った。

「このカードどこが……」

「この世界にもバトルスピリツトがあるのか?」

まどかの呟きを聞いて、ダンが反応するとマリとさやかは首を横に振った。

「いいえ、バトルスピリツトなんて聞いたことないわ。」

「うん、まどか。何か勘違いしてるんじゃないの?」

「……、そつなのかな？少し前に何故か道に落ちてたの拾つたんだけ
ど、ダンさんが持つてるカードに似てて……」

「とりあえず、見てみないと分からないからな。後で……」

「ダンがまどかにカードを持ってくれないか頼もうとしたが、さ
やかはあることを言い出した。

「だつたうまどかの家でしばらくお世話になつたら、ダンさんもこ
れから住む家とか考えてないでしょ……」

「えつ、で、でも、パパとママが……」

「まどかのママとパパなら理由話せば口にしてくれるから大丈夫だ
よ。ねつ、ダンさんもそれがいいでしょ」

「…………まあ、俺はビリでもいいんだが……」

「…………ダンは新たな出会いを果たすのであった。

そんな事があつた中、ダンが見かけた黒髪の少女……暁美ほむらはビルの屋上に立っていた。

「馬神ダン。あなたは……」の絶望しかない世界を救ってくれるのかしら？」

ほむらは手に持つた一枚のカードを見つめた。それは紅い龍が描かれたカードだった。

第2話 ダンの新しい出来事（後書き）

ほむらが持っていたカードとまどかが拾ったカードはダンのあのカードです。そのカードの事については後半あたりでやるつもりです。

第3話 フレイヴ（前書き）

更新が少し遅くなつてすみません。第3話です。

第3話 フレイヴ

ダンがまどかたちの世界へ訪れてから一日が終わった。ダンはまどかの家に居候することとなつたが、まどかの両親に反対されるのではないかと思つていたさやかであつたが……

「ええ、まどかのお母さんとお父さん、ダンさんが居候することについて賛成したの」

「うん、ダンさんが今、帰る場所がないつて言つたら、お母さんとお父さんが住む場所が見つかるまで住んでいいよつて言つたんだ。」

まどかとさやかの二人はキュウべえと一緒にマミとダンの一人が待つファミレスに向かつていた。そんな中さやかはあることを思い出した。

「そういえば、昨日言つてたバトルスピリットのカードは見せた?」

「ううん、昨日見せようと思つたんだけじ、ビニに置いたか忘れちやつて、ダンさんは後でいにいつて言つてたから……」

「ふうん、あつ、着いたみたいだよ。」

まどかとさやかの二人はマミとダンが待つファミレスにたどり着くと、二人は中へ入つていった。

ファミレスに入るとあるテーブルにはマイビダンが待っていた。

「やつときたみたいだな。」

「そうね。」

「お待たせしました~」

まどかとさやかの二人がそう言しながら、席に付くと……

「さて、一人も来たことだし、魔法少女体験ツアーファースト、はりきつていきましたよ。準備はいい?」

「準備になつているかどうかわからないけど、もつてきました

さやかは包んであった布から金属バットを取り出した。

「何も無いよりはましかと思つて」

「まあ、そういう覚悟でいってくれるなら頼もしいわ

「マリは少し苦笑いで言った。

「俺もテックはしっかり持つてきた。」

「ダンがやつ言いながらテックを見せるべ、まどかは申し訳なさやつにダンヒヤツ言つた。

「あ、あの、ダンさん。『めんなやこ。お母さんたちがいない間家事とかしてもううて……』

「いや、ただ住んでいるだけじゃ行けない気がしてな。別にまどかが謝る必要はない。そういうえば、まどかはなにか持つてきたのか？」

「えっと、私は……」

とかばんからノートを取り出して、3人に見せた。それには自分の魔法少女姿の絵が描いてあった。

「うわあ……」

「とつあえず、衣装だけは考えておつかと思つて……」

「「「ふひ、まほまほ」」

「え?・ええ、」

とハートを見てしかかとマリは笑い出し、まどかは顔が赤くなつた。

「うそ、意氣込みとしては十分ね

「」いやあ、参った。あんたこは負けるわ」

「」……」

今から魔女退治に行こうといつに、まどか達は笑顔でいた。そんな三人の姿を見ていたダンは元の世界にいる仲間たちとの思い出を思い出していた。

（みんな、今頃どうしているんだね？　まあも……）

その後、ダンたちは初めて会った場所へ行き、魔女搜索のことやマ

ミから聞きながら、反応が強い場所へとたどり着くと、そこには廃ビルであった。そんな廃ビルの屋上で一人の女性が飛び降り、マミはその女性を助けだと、

「なんだこれは？」

ダンは女性の首筋にある刻印に気がついた。

「魔女の口付け……」

「『』に魔女が……」

「ええ、行くわよ」

「分かつた。」

四人は魔女の空間へと入り込むとダンに金色のバトルスタイルが装備された。どうやらバトルスタイルは限定された空間か、自分の意志で装備することができることにダンは気がつくと、まどかとさやかの方を向いた。

「俺とマミジヤ一人を助けることが出来なかつたりするかもしけない。だから、ブレイドラを召喚」

ダンが一枚のカードを取り出し、まどかとさやかの前に黄色に白い羽が生えたモンスターが現れた。

「わつ、かわいい。」

まどかはブレイドラを見て言つと……

「ブレイドラ。一人を守つてやつてくれよな。」

『さゆー』

ブレイドラはダンに返事をするより先に鳴いた。マリナはとにかくさかれていた金属バットに魔力を込めた。

「気休めだけじ、役に立つはずよ。」

準備を終えた四人の前には大量の魔女の手下が現れ、四人を囲んだ。

「ダンさん。行くわよ。」

「ああ、来い！ジークアポロドーランゴン。」

ダンの前に現れたジークアポロドーランゴンはマリナと共に魔女の手下を撃退していくのであった。

そして四人は最深部へとたどり着くと、マリは羽の生えたおぞましい姿をしたものがいた。

「あれが…」

「そり、あれが魔女よ」

「ぐう…」

「あんなのと戦うんですか？」

「大丈夫、負けるもんですか！」

マミはさやかが持っていたバットでバリアをはって、マミとダンとジークアポロドーラゴンは魔女に攻撃を仕掛けた。マリは帽子から何本か銃を出し、銃で逃げまよう魔女を撃ち、ジークアポロドーラゴンは魔女に体当たりをしようとしたが、魔女は素早く動き出しへークアポロドーラゴンの後ろに回り込み、攻撃を仕掛けた。

『ギャオオオ』

「ジークアポロドーラゴンー？」

攻撃を受けたジークアポロドーラゴンは地面に倒れてしまつた。マリもまた油断して、魔女の手下に捕まり、銃を放つもはずれていつた。

「ああ…」

「マリさー

「大丈夫、未来の後輩にかつこ悪いとこ見せられないしね！」

とはずれた銃のあとから黄色い触手が出て、魔女を捕まえた。

「今よ。ダンさん。」

「ああ、砲龍バルガンナーを召喚！」

ダンの前にさらに一體のスピリットが召喚された。それは背中に巨大な砲門を背負つた紅い龍だった。

「バルガンナーをジークアポロドラゴンにブレイヴ。」

バルガンナーが飛び上ると龍の姿から巨大な砲台に姿を変え、ジークアポロドラゴンの背中に合体した。

「行くぞ。ブレイヴスピリット。魔女を撃ち貫け！！」

一本の砲台が動けずにいる魔女に狙いを定め、紅い弾丸が魔女を貫くのであった。

魔女を倒し、魔女の結界も解かれるとマリはあなたのを拾い上げた。

「それは？」

「これはグリーフシード。魔女の卵よ。」

「卵…」

「運がよければ、時々魔女が持つてるの」

「大丈夫、その状態は安全だよ。むしろ貴重なものだ」

「私のソウルジエム、タベよつていたんでしょ」

「そういえば」

「このグリーフシードを使えば、ま、」

マリはグリーフシードをソウルジエムに近づけて、ソウルジエムから黒い霧がグリーフシードに吸い込まれた。

「きれいになった。」

「」の前話してた、魔女の見返りつてのがこれ

トマリはグリーフシードを投げ捨てた。そしてその方向には…

「あーーー。」

そこには黒髪の少女がいた。ダンはその少女に見覚えがあった。

(あーつむ、昨日の……)

「あなたにあげるわ。あと一度くつこな使えるはずよ。暁美ほむらさん」

(暁美ほむら……。それが彼女の名前か……)

「あーつ……」

「それとも、不服かしら?」

「あなたの獲物よ、自分のものにすれば

とほむらひまマリ!グリーフシードを投げ返し、それをマリが手でとる。

「…………」

ダンはじっとほむらを見つめていると、ほむらがダンに向かって言った。

「貴方の力、見せてもらつたわ。確かに強力な力だけ、あなたじゃ……ヤツには勝てないわ。」

「奴?何のじとかは知らないが、今日の戦いを見ただけでそう判断

するのは早いぜ。俺の「テッキ」には13枚の神の力を宿したカードが眠っている

「……そう、だけど、気をつけることね。あなたがどんなカードを持つてしようとも……ヤツには……勝てない。」

ほむりは途中に小声で何かを言った。ダンはそれを聞き取っていた。

(ワルブルギスの夜? 何なんだ?)

こうしてダンたちの初めての魔女退治は終わりを告げるのであった。そしてこれがダンにとって悲劇を回避するための戦いが始まるつとていた。

第3話 フレイヴ（後書き）

次回は原作の3話の話をやります。次回辺りに十一富×レアを出す予定です。

第4話　願いの使い方（前書き）

お待たせしました。第4話です。今回は原作の3話の話に突入します。最初にいっておきます。マリ/セラは生存させます。

第4話 願いの使い方

初めての魔女退治から数日が経つたある日の夜。ダンたちは魔女狩りをしていた。

「ティロフィイナーレ

マミがどどめをさし、結界から元の場所に戻つていった。

「やつ。マミさんカツコイー

「もつ、見せ物じゃないのよ

「わかつてますつじ

「今回はそこまで強くはなかつたみたいだな。グリーフシードも落とさなかつたみたいだ。」

ダンはあたりを見渡すがそれらしきものはなかつた。

「今のは魔女から分裂した使い魔でしかないからね

「ここんとこハズレばっかじゃない?ダンさんの新しいモンスター見てみたかったんだけどな

さやかがそう言つてダンは苦笑いをしながら言つた。

「さすがにそう簡単に新しいモンスターを呼ぶ必要はないぐりー。

「マミのサポートが良かつたみたいだからな。」

まどか達はまだジークアポロドラゴンしか見たことがなかった。ダンがいうにはあと二体のエーススピリットがいるらしいが、ここ最近戦ってきた魔女はそれだけで十分戦える強さだということだ。

「使い魔だつて、成長すれば魔女になっちゃうの。放つておけないのよ。さ、帰りましょう」

三人がそう言つて帰ろうとする中、ダンはこの間会ったほむらが言つていた言葉を思い出していた。

「ワルブルギスの夜。一体何なんだ？」

ほむらが言つていた謎の魔女の存在について、ダンは少し気になっていたのであった。

四人が帰る途中、マミがある質問をした。

「2人とも願い事決まった？」

「うーん、まどかは？」

「私も…………」

「まあ、やうこいつものよ。これ考えるとなると

「マリマリせんせんな願い事したんですか？」

聞いたとたんマリは深刻な顔をしてまどかは少しあわてていった。

「こせ、あの……、どうして聞いていたか聞きたくてわけじゃなくて……」

マリはさじく微笑み言った。

「私の場合は……」

と自分が願い事をしたときの話をしていると、ダンは隣を歩くキュウベえに話しかけた。

「なあ、キュウベえ、ワルフルギスの夜つて何なんだ？」

「どうして君がその名前を知っているのかい？」

「ちょっとな。それこそ一體……」

「やうだね。まだ僕も詳しいことは知らないけど、ワルフルギスの夜は災厄の魔女だってことだよ。」「

「災厄？」

「まあ、どんなものかはまだよくは知らないけど。でも、君が持つ一枚のカードなら倒せると想つよ」

ダンは自分のデッキに歸る1~3枚のカードを思い出した。それは神に近い力を持つたカード。もしもそのワルブルギスといつやつと戦う時が来たら……

「あの、ダンさん？」

ふっと、考え方をしてくるとまどかが心配そうになっていた。

「ん、どうしたんだ？」

「いえ、何だかデッキ見つめてたんで……ちょっと気になつただけです。」

「そつか、俺はただ考え方をしていただけだ。」

「やつですか。」

ダンとまどかがそんなことを話してくると、セイカがマリマリあることを聞いた。

「ね、マリさん、願い事つて自分の事柄じゃないと駄目なのかな?」

「え?」

「たとえば、あたしなんかよりよほど困っている人がいて、その人のために願い事するのは……」

「それって上條君のこと?」

「た、たとえ話だよ」

「知り合いか?」

「お友達です」

「別に願い者自身の対象になるわけじゃないけどね」

「でも、あまり感心できた話じゃないわ。他人の願いをかなえるなら、自分のことを考えておかないと。美樹さん、あなたは彼に夢をかなえてほしいの? それとも彼の夢をかなえて恩人になりたいの?」

「アハアハ……

「同じ」とも全然違つことなの。み

ともやかが少し黙つていた。

「『めんね、でも今のうちはいつとかない』……

「せやかちやん」

「……やうだね、あたしの考えがあまかった。『めん

「やつぱつ、難しい事柄よね。あせつて決める」とじゃないわ

「僕としては早く決めてくれれば助かるんだけどね

「だめよ、女の子をせかす男子は嫌われるぞ」

四人が帰ろうとしている時、ほむらはそんな四人の姿を見つめていた。

「…………まぢか。きっと貴方のことを救つてみせる。」

ほむらがそう呟いていた。すると、ほむらの周りに一匹の緑色に輝く蝶が舞っていた。

「分かつてゐるわ。この一枚は時が来てから渡す。それがあなた達との約束だものね。」

第4話　願いの使い方（後書き）

あんまり話が進んでいませんが、次回辺りシャルロッテとの戦いが始まります。

第5話 魔女vs天蠍神騎&巨蟹武神（前書き）

さて、ついにシャルロッテの登場です。ゼウスマリを救出するかはお楽しみに、

第5話 魔女vs天蠍神騎&巨蟹武神

まどかの家でダンが家事を全て終わらせると、まどかの父、知久がダンある頼み」とした。

「あつ、ダンくん。悪いんだけど、買い物行つてくれないかな？」

「ああ分かつた。」

「いや、悪いね。色々と家事を手伝わせて……」

「俺は居候の身だ。これぐらいはしないとな。」

ダンはそう言いながら、知久から買い物リストが書かれているメモを受け取るのであった。

買い物を終えたダンは病院近くを歩いていると、そこでばったりとまどかとさやかの二人と出会った。

「あつ、ダンせん。」

「ダンせんは買い物帰りですか？」

「ああ、二人は？何か病院から出てきたみたいだけど、誰かのお見舞いか？」

「せやかちやんのお友達のお見舞いです」

「せやか」

「するとせやかは何故かふてくされていた。」

「でも、都合悪くて会えなかつたんです」

「まあ、検査が何かだつたんだろ。だつたらまたいつでも会えるわ。」

「

ふつとまどかは何かに気がついた。それは……

「どうした？」

「あれつて……」

ダンとせやかがまどかが指を差した方を見るといこひはグリーフシードが壁に埋まっていた。

「グリーフシードだ。孵化しかかつてる。」

まどかの肩に乗っていたきゅうべえがグリーフシードの状態を確認して言った。

「魔力の侵食が始まってる。結界が出来上がるまでココから逃げよう。」

その時、さやかが首を振つていった。

「駄目だ。魔女が病院に取りついたらやばいって…………マリもさが言つてた。」

「確かにヤバイな。」

「……」
「（）」私は私が見はつておへから、まどかはマリやさの所へ

「でも……」

「無茶だよ。孵化にはまだ早いけれど、結界に閉じ込められたら、君は出られなくなる」

「でも、放つて置けば逃げられちゃうでしょ」

「しかし……」

キュウべえは考えてさやかの肩に乗り

「わかった。僕も一緒に残りつ。結界迷路に閉じ込められてもマリとならテレパシーで僕とさやかの位置を伝えられるから」

「キュウべえ……」

「わかった」

「だったら、俺もマリの所へ行く。なぜかたちには……」「つだ。

ダンはそいついで、デッキから一枚のスピリットを召喚した。それは……

「ジークアポロドリゴン。そやかたちを守ってくれ。」

まだ魔女の結界の中ではないので顕現していないジークアポロドリゴンだが、ダンはジークアポロドリゴンを魔女の結界内に召喚したのだ。

「行くぞ。まどか」

「はい」

まどかとダンはマリの近くへと向かうのであった。

数分後

「ミミ」

まどか達はミミを連れて戻ってきた。3人は結界の中に入った。

(キュウベえ、状況は?)

(大丈夫。すぐ孵化はしないから。急がなくていいから、なるべく静かにきてくれるかい? 大きな魔力を使って卵を刺激するのはまずい!)

(わかったわ)

テレパシーでわゆうべえと会話した後、ミミはダンに向かつて注意をした。

「ダンさん。美樹さんの所にジーフィアポロドラゴンを送り込んだんですね」

「ああ、守る奴が必要だろ」

「まだ攻撃をしないようにして、このまま離れていたらいいからダンさんの強力なスピリットでもやられてしまうわ。」

「分かった。」

「まったく、無茶しすぎでいいたいけど、今回に限っては……」

その時、ほむらが3人の目の前にいた。

「またあなたね、暁美ほむり」

「今回の獲物は私が狩る。もちろん結界内の3人の安全は保障する」

「だから手を退けって?私が信用するとでも?」

「マリは魔法でほむりを縛り付けた。

「ば…バカ!」んな」としてる場合じゃ……」

「怪我をするつもりは無いけど、暴れたら保障しかねるわ。行きましょう、鹿田さん、ダンさん」

「はい…」

「あ…ああ…」

「待ちなさい!今度の魔女は…これまでと訳が違う」

ほむりの忠告を無視してまどかとマリは結界の奥に進んで行く。したとき、ダンは立ち止まり、ほむらの元へと戻った。

「暁美ほむり。お前がさつあいつたのは本当か?」

「え、ええ、そうよ。今回の魔女はかなり危険。どうして分かるかは教えられないけど……」

「いや、お前の田を見れば分かる。お前は嘘をつこていないし、マミたちを心配してここに来たんだる。だったら……」

ダンはそう言って、一枚のカードを取り出すと、ほむりを縛ついたマミのコボンを蒼い鎌が全て切り裂いた。

「行くぞ」

「ええ、」

ダンとほむりは一緒に魔女の元へと向かったのだった。

結界の奥へたどり着くと一度マミがヌイグルミみたいな魔女に止めをさそうとしていたが、ダンがマミの様子がおかしいことに気がついた。

(マリの奴? 何か様子がおかしい。調子が良すぎる。)

「マズイわ。あの魔女は……」

ほむらが何かを言いかけた瞬間、ヌイグルミの魔女の口から巨大な大蛇のみんなものがでてきた。

「え……？」

魔女はマリの近くへ行き、マリを抱きしめついた。まじかとやかが恐怖のあまり田を開じる。だが、まじかは恐る恐る田を開けると魔女はマリを抱きしめていなかつた。

「アハハハ！」

「まじかーあそーー！」

さやかが盐きし方を見るとケーキの上にまむりがマリを抱き抱えていた。

「……暁美さん。あなた……」

「油断しちゃダメよ。」

「『』『』『』『』『』。」

マリがほむりに謝っていると魔女は再びマリとほむりに襲いかかつてきだ。だが、ジークアポロドラゴンが魔女の尻尾を掴み、マリ達の元へと行かせないようにならした。

「悪いが、ここで終わりにするぞ。魔女。」

『ガアアアアアアアアアアアアアア』

ジークアポロドリゴンは雄叫びを上げながら、魔女の体を噛み付く。すると魔女は反撃としてジークアポロドリゴンの顔を食らってつき、ジークアポロドリゴンは姿を消した。

「スピリットを食べやがった。」

『？』

魔女はおかしな事を言いながら、ダンに向かって大きく尻尾を振ると、ダンは壁まで吹き飛ばされてしまった。

「ぐう、コアが一つ削られた。どうやら、威力が大きければ大きいほど、コアが減るのか。」

ダンのピンチを見ていたまじかとわやかは……

「ど、どうしよう。あのドーラゴンがやられちゃった。」

「ドーラさんも何か腰抜かしかけてるし、転校生はじつと見てるし……ドーラさん」

焦る一人。いつも場合にキュウベえが契約などとこつけずであったが……

「どうやら、馬神ダンのトッキに眠るスピリットが目覚めるみたい

だね。」

「「えつ？」」

「こんな強敵なら、こいつは出し惜しみする必要はないな。古き神よ、今こそ甦れ！天蠍神騎スコル・スピア。巨蟹武神キャンサーード。」

ダンが一枚のカードを出した瞬間、魔女の前にさそり座とかに座の星座が浮かび上がり、そこから蒼く巨大なサソリのスピリットと強固な鎧を身に纏ったスピリットが現れた。

「あれが、十一富×レア。ワルブルギスに対抗できるかもしないもの」

ほむりは一体のスピリットを見てそう呟いた。

「行け！スコル・スピア。キャンサーード！奴を切り裂け」

ダンが一体のスピリットに呼びかけた瞬間、一体のスピリットは魔女の尻尾を巨大なハサミで切り取った。魔女は苦しみながらも、二体のスピリットに襲いかかる。だが、キャンサーードのハサミが魔女の口を切り裂き、開け放しになつた魔女の口に掛けてスコル・スピアは尻尾から蒼いレーザーを発射させ、魔女を貫き、魔女は爆発した。

魔女を倒し終えたダン達。するとマリはやつらの魔女から手に入れ
たグリーフシードをぽむらに渡した。

「今日は貴方のお陰で助かったわ。これはあなたのものよ

「……私別に、あなたがあのままやられていたらこれから来る魔女
に対抗する戦力が無くなると想つたから…………」

「ふふ、やうこいつにしておくわ。でも、グリーフシードをひん
と取つてもひかわ。」

「ええ、」

「ひしトイマ!!」のピンチを救つたことが出来たダンとほむらりであつたが、
そんな中まどかは……

（今日はダンさんとほむらちゃんがいたから助かつたけど、もしも
あの一人が助けに来てくれなかつたら……）

まどかは魔法少女の憧れが少しずつであるがなくしつつあったのだ
つた。

第5話 魔女ｖｓ天蠍神騎＆巨蟹武神（後書き）

「マニ」救出は最初はダンが庇うとか考えていたのですが、何かダンの性格を考えて、ほむらを助けるかなと思い、ほむらにマニの救出をやらせました。

第6話 黒毛星龍と赤い魔法少女（前書き）

お待たせしました。第6話です。今回はまどかの原作の4話の話に入りますが、ちょっとあるスピリットを出したくなつたので、出します。なのでちょっと話をカットします。

第6話 黒き星龍と赤い魔法少女

十一富×レアを使用して、魔女を倒した次の日、まどかの様子にダンは心配していた。

（やつぱり、昨日の戦いが原因なんだろ？な。もしもむらと俺が間に合つてなかつたら……マミは確実に死んでたはずだ……憧れていた魔法少女の仕事が死と隣り合わせだつて知つたからな。）

ダンはそう思いながら、頼まれた買い物を続けていたのだった。だが、何かの視線に気がついた。

（なんだ？今の視線は……殺氣に近い感じが……）

ダンはあたりを見渡すが、ダンに対しても殺氣を出している相手を探すが、それらしき人物は見つからなかつた。とりあえずダンは人通りの少ない場所へ移動した。

（もし、さつきの視線が本物だつたら……こんな人通りの多い商店街じゃ、他の人を巻き込む。それなら……）

ダンはしばらく走り、人がいないビルの廃墟に入つていった。そしてダンは……

「出てこい。ここなら人がいない！」

「ふう～ん、キュウべえから話聞いてたけど……なかなか面白いやつじやん。」

ダンは声が聞こえた方を見るとそこには赤髪の少女が一人いた。一見普通の少女に見えるが、だが、少し違った。それは、少女の手には槍が握られていた。

「お前……魔法少女か？」

「まあ、そんな所、キュウベえからこの街にいる魔女がちょっと手強いらしく、マミ一人じゃ手が足んないらしいから、来てみたけど、なかなか面白そうな奴がいるじゃん。」

「ようするに腕試しか。わざわざ殺氣の混じった視線を出してたのはそういう事か」

「視線？何のことだ？あたしはあんたがここに入るのを見かけたら……こつして……」

少女がそう言った瞬間、突然一人がいた廃墟が奇妙な空間に変わった。

「この空間は……まさか！」

「どうやらあんたを見ていたのは人間に取り付いた魔女みたいだな。まあ、ちょうどグリーフシードがなかつたから稼げそうだな」

少女は槍を構えて言ひと、ダンもテッキを取り出した。

「どうあえずここから脱出するために俺も協力する

「へへ、お前の力見せてもらひぜ。馬神ダン」

ダンと少女は一緒に空間の奥へと進んでいった。

二人が空間の最深部へとたどり着くのだが、奇妙な感じがしていた。

「ずっと奥へ進んできたが、手下が全く出てこないのはおかしい気がする。」

ダンがそう言つと少女が答えた。

「生まれたばかりの魔女だからう理由じゃないのか？あたしも魔女の事情についてはよく知らないけど。とりあえず、さっさと『』の空間抜けよしね。」

少女がそう言って、最深部に入るための扉を開けた。最深部には何の景色も物も置いて無く、ただ白い空間が広がっており、そこには今まで化物じみた姿をした魔女ではなく、黒いワンピースを身に纏つた少女がいた。

「『』いつが魔女か？何か今までの奴とは違うな」

赤髪の少女が魔女を見ながら言つと、魔女はゆっくりと微笑み、言った。

「『』たにちわ。魔法少女さんと貴方は……馬神ダンですね。私は『無の魔女』名前は無いわ」

（『』の魔女、普通に喋つていい。今までのやつとはかなり違う気が……）

「人間型だろうが何だろうが魔女とは変わりない。退治させてもらひやー！」

少女がそう言いながら、無の魔女に槍を突き刺そうとした。だが、魔女に攻撃が当たる瞬間、槍の刃が消えた。

「なつ、」

「『』めんなさい。貴方の攻撃は消せてもらいました。」

魔女がやんわりと微笑んだ。すると少女が後ろへ下がった。

「！」この能力、あらゆる物を消し去る能力か！？

「正解です。私の魔女としての能力は『無』ありとあらゆる物を消し去る力です。なので手下とか作っても私の力で全部消えちゃうんです」

魔女は笑顔でそう言つたが、ダンたちにとってはかなり危険な相手だった。

（全部消し去る能力。どうすれば…………だけビコイツを野放しにしておく訳にはいかない。）（こは…………）

ダンはテッキから一枚のカードを引き、召喚した。

「ジークアポロゾラゴン。魔女を討て！」

ジークアポロゾラゴンが召喚され、魔女に向かつて炎を出して攻撃するが、魔女に当たる前に炎がかき消された。

「無理です。私を倒すのは…………なので、今回は貴方にお願いがあるんですよ。馬神ダン」

「願い？なんだ？」

「私たち魔女は貴方が言つスピリットに近い存在です。私も果たされなかつた願いがあるのに魔女となつてしましました。ですが貴方が使うそのスピリットを召喚する力で私を貴方のスピリットとして戦わせてください。」

魔女のとんでもない願いを聞いていた少女が魔女に対して怒鳴った。

「てめえ、魔女のくせに何でそんなアホみたいな願いを言つんだよー！」

「あなた、知らないみたいね。魔女の元々の姿について、まあ、いずれ知ることになるわね。とりあえず馬神ダン。私の願い聞いてもらいますか？」

ダンは魔女からの願いを聞いて、少し考え始めた。

（魔女とスピリットが近い存在。それにこの魔女、魔法少女について俺たちが知らないことを知ってる。それにこの能力、……仲間にする必要はあるかもしない）

「分かつた。お前を俺のスピリットにする。どうすればいい？」

「ありがとうございます。とりあえず、この子と戦って勝利すればこの子がいたカードに私が入ることができるので、」

魔女がそう言って、一枚のカードを取り出した。

「これは闇の力をもつたカードの一つ。力が強いせいで私の力では消すことが出来ませんが、調度良かつたです。では、行きます。光滅ぼす闇の魔王！ 滅神星龍ダークブルム・ノヴァ 召喚！！」

突然空間が黒に染まるとそこから白く輝く翼を生やした黒いドラゴンがその姿を現した。ダンはそれを知っていた。

「まさか、ダークヴルム・ノヴァ。」

「では、お願いしますね。」

第6話 黒き星龍と赤い魔法少女（後書き）

とうあえずオリキャラというか、オリカになるかもしない魔女の登場です。なんで出したかといつて、セヤカが魔女化した時のためのものです。

第7話 太陽龍 vs 滅神星龍（前書き）

お待たせしました。今回でこのバトルは終わります。

第7話 太陽龍vs滅神星龍

ダンと赤い魔法少女の前に現れたのは、ダンを何度も苦しめた黒き星龍であった。

「ダークヴルムがこの世界に……どうこうことだ。名も無き魔女」

『このカードは、少し前に私のテリトリーに落ちてました。そして私はこのカードから感じる恐ろしい力を感じ取りました。このカードは私達魔女と同等の力を宿します。』

「魔女と同じ力を……お前は自分をカードに封じて一緒に来て欲しいと言っていたな。何故このカードを倒す必要がある!」

『先程も言ったとおり、これは力試しこのカードはしばらくしたら魔女として活動を始めます。そうしたら、ワルブルギスが来る前に世界は滅びますね。』

少女は笑みを浮かべながら言った。ダンはといつと……

(またワルブルギス。キュウベエに聞いたが災厄の魔女としか聞いてない。一体奴は何なんだ。とりあえず今はこのダークヴルムを倒すのが先だな。)

「ジークアポロドラゴンーさらにバルガンナーを召喚。ジークアポロドラゴンにバルガンナーをブレイヴ!」

ブレイヴ状態のジークアポロドラゴンはダークヴルムに向かって攻撃を仕掛けた。だが、ダークブルムは攻撃を瞬時に避け、ジークア

ポロドラゴンの首に噛み付いた

『ガオオオオオオオオ…』

ジークアポロドラゴンは雄叫びを上げながら、ダークヴルムの噛み付きを振りほどこうとしたが、ダークヴルムの牙は深く食い込んでおり、上手く振りほどけないでいた。

（ぐつ、さすがはダーク、ヴルム。この魔女空間では本来の力を發揮することができないとはいえ、ノヴァの力を持つだけはある！…）

ダンが次の一手を考えていると、ダークヴルムの額に槍が突き刺さった。

「なんだか面白そうだな。あたしも混ぜる」

槍を突き刺したのは赤い魔法少女だった。

「気をつける。こいつは魔女の力を持つ上にかなりの能力を秘めている…」

「安心しな。あたしのサポートはここまで、あなたの龍は無事抜けだしたみたいだ」

ダンがジークアポロドラゴンを見ると確かに噛み付きから解放され、自由に動けるようになったジークアポロドラゴン。

「よし、ブレイヴ解除！」

ダンはジークアポロドラゴンとバルガンナーのブレイヴを解除し、

新たに刃狼ベオ・ウルフを召喚した。

「ベオ・ウルフをジークアポロドーランにブレイヴ。行け！ブレイヴスピリット！」

ジークアポロドーランの体にある白い宝玉が緑色に変わり、両手には一本の巨大な剣が握られた。

「行くぞ！ ジークアポロドーラン！ ダークヴァルム・ノヴァにアタック！」

ジークアポロドーランは空へと飛び上がり、ダークヴァルムに向かって剣を振りかざした。だが、ダークヴァルムはその剣を受け止めて、回転し、ジークアポロドーランを投げ落とした。

ジークアポロドーランは立ち上がり、さらに攻撃をしてきた。ダークヴァルムは黒い炎を放つがジークアポロドーランはベオ・ウルフの一本の剣で炎を切り裂き、ダークヴァルムに剣を突きさしたのだつた。

魔女の空間が解け、さつきまでいた廃墟に戻ったダン。するとさつきまで一緒にいた赤い魔法少女の姿が消えていた。

「あいつ、お礼言いたかったんだけどな。」

『あの子にはあの子のやるべき』ことがあるのですよ。ダン』

突然、どこからともなく声が聞こえ、ダンはポケットに入ったティキを取り出すと一番前に名も無き魔女のカードがあつた

「お前……」

『ダークヴルムは呪いから解放され、姿を消しました。そして空白となつたカードに私が入りましたのです。これからは魔女退治に協力します。ダン』

「いいのか？お前にとつて同胞を殺すもんだぞ」

『ああ、実は私が魔女というのは嘘です』

「はあ？」

『私はある者たちの意思によって生み出された精霊です。その方たちに貴方がワルブルギスを倒せるかどうか確かめるためにコンタクトを取りました』

「ある者たち？誰だそれは……」

『それはいざれ知るでしょう。』

「いざれか…………といひでお前のことはこれからなんて呼べばいい？名前ないんだろ」「

『そうですね。私のことまクリアとお呼びください』

クリアは笑顔でそう言った。

第7話 太陽龍ＶＳ滅神星龍（後書き）

次回は本編に戻ります。

第8話 新たな魔法少女（前書き）

やつと原作の話に戻ります。今回は第4話の後編の話となります。

第8話 新たな魔法少女

ダークヴルムを撃退し、そしてダンの肩には新たなパートナークリアが乗っていた。今は頼まれていた買い物を済ませ、鹿田家に戻ろうとしていた。

「そういえば、クリア。お前の姿は俺にしか見えないのか？」

「そうだよ。私の本体はダンの『テッキ』の中にあるし、まあ、今私は精神体みたいなものだよ。」

「なるほどな。なら、見つかることないか。とりあえず早くかえ……ん？」

ふつとダンは何かに気がついた。それは、ちょっと離れた場所にまだかが誰かと一緒にいるところだ。

「まどか、何やつてるんだ？それにあの大人数……」

「ダン、あの集団から私と同じ『魔女の匂』がするよー。」

「魔女だつて、まさか……」

ダンは急いで、後を追つたのだった。

まどかは仁美に連れられ、廃工場の中に入ると、そこには一人の男がパイプ椅子に座っていた。

「今の時代に俺の居場所なんて……あるわけねえんだ」

男の目の前には何かの液体が入ったバケツがあった。そして、エプロンの纏つた女性が洗剤をバケツの中に入れようとした。まどかはあることに気がついた。

（あれって…………まさか…………）

それは塩素系の洗剤だった。このままだとまずいと思つたまどかは止めに入ろうとした瞬間、仁美に止められた

「邪魔してはいけません。これは神聖な儀式なんです。私たちはこれから素晴らしい場所に行くんです。」

仁美がそういうと周りの人々が拍手した。まどかは仁美的手を振り

ほどき、バケツを奪い、窓から外に投げ捨てた。

「これで、安全……じゃない。」

仁美達はまどかを見んだ。まどかは物置に逃げ込んだ。だが、その瞬間、空間が歪んだ。そこにはテレビに写りこんだ魔女と天使の人の形の形をした手下がいた。

「いや、いやああああああああああああああああああああああああ

魔女がまどかに襲いかかろうとした瞬間、

「つおりやあああーーー！」

何本もの剣が魔女に突き刺さった。

「大丈夫？ まどか？」

そこには魔法少女の姿をしたさやかがいた。

「さやかちゃん。もしかして……」

「あはは、魔法少女になっちゃった。でも、まどかのピンチに間に合つてよかつたよ。後は任せて！」

さやかが魔女と対峙すると、魔女の手下が一斉にさやかとまどかに襲いかかつた。さやかは手下を撃退しようとした瞬間、

「マジック！ サジックタフレイムを発動！」

無数の炎の矢が降り注ぎ、手下たちを一気に撃退した。まどかとさやかは声が聞こえた方を見るとそこにダンとジークアポロドラゴンがいた。

「大丈夫か？一人とも！」

「ダンさん！？」

まどかはダンの姿を見て、安心するが、魔女はジークアポロドラゴンに攻撃を仕掛けてきた。

「ジークアポロドラゴン！ 雜ざ払え！」

ダンの指示を聞き、ジークアポロドラゴンは魔女の攻撃を尻尾で杂ざ払った。

「よし、さやか、一氣に行くぞ！」

「任せて！」

ジークアポロドラゴンとさやかは同時に魔女に接近し、ジークアポロドラゴンの炎が魔女を焼き、魔女はその炎から逃れようとした瞬間、さやかの剣が魔女を切り裂いた。

魔女を撃退したことで空間が元に戻り、ダンたちは操られていた人々を介助していると、そこにマリとほむらの二人がやってきた。

「あなた……」

「美樹さん。まさか契約したの」

「マリさん、はい、キュウベヒと契約しました！」

「わー、」

マリは何故かさやかの姿を見て少し落ち込んでいた。ふつとダンはほむらの方を見るとほむらは……

「彼女が魔法少女になるのは逆らえない運命なのね……」

そつづぶやき、工場から出て行った。ダンはそんなほむらの後を追

うのであった。

「お前の言葉を聞いていて思った。お前は何かを諦めている気がす

「ずっと気になっていた。お前、何か知っているのか？」

「何かつて？」

ほむらに追いついたダンはほむらを呼び止めた。
ほむらはダンの方を振り向いた。ほむらの表情は少し悲しそうに見えた。

「何か用？」

「ほむりー。」

るー一体これから先何があるっていうんだ！

ダンはほむりに向かって言つと、ほむりは黙つたまま歩き出し、やしてこういった！

「あなたはいざれ知るわ。魔法少女の運命を……世界の終焉を……そして、あなたはそんな運命を打ち破る力を持っている。それを見ておく必要があるわ」

ほむりはそう言い残し、姿を消すのであった。ダンはほむりが消えた方をただ見つめていた

「魔法少女の運命……世界の終焉……ワルブルギスと関係があるのか？」

第8話 新たな魔法少女（後書き）

次回は杏子がちゃんと登場します。 さらにダンの一枚目のおースも登場です

第9話 再会の魔法少女（前書き）

つこに木阳子の登場です。 タリゴダンの一休田のエースが登場します。

第9話 再会の魔法少女

さやかが魔法少女となつてから数日が経つたある日の夕方。ダンはほむりのことを探していた。

(やつぱり、マギサが言つていた死ぬはずの俺をこの世界に呼んだ少女はほむらなのか……)

ダンはそう思いながら、街を歩きながらほむりの姿を探していた。すると後ろから……

「あれ？ ダンさん？」

声をかけられ、振り向くとそこにはまどか、マリ、さやかの三人とキュウベえがいた。

「みんな、魔女退治か？」

「はい、まだ私も初心者だからマリもさに色々とコソシを聞きながらですけど……」

「ふふ、魔法少女が一人増えたんですもの。ここは先輩として色んなことを教えるきやね」

マリは嬉しそうに手の中、ダンはまどかの側に寄った。

「まどか、いいのか？」の間の一戻で魔女の怖さを改めて知ったんじや……

「はい、マリさんが殺されそうになつた時も、この間の時も魔法少女の勤めが凄く怖くなつたんですけど……いやかちやんのことが色々と心配で……」

「そうか」

ダンは微笑みながらまどかの頭を撫でた。まどかは少し恥ずかしそうにしていた。

「あの、ちょっとと思つたんですけど、ダンさんは何で魔女と戦うんですか？ 私と違つて巻き込まれたとかそういう感じなくって……その、何かのために戦つている気がして……」

「もうだな……俺は誰かに呼ばれたらしくから、その呼ばれた理由をじるために戦つてる。今のところはそんな感じだ」

「理由を知るために……もしも魔女との戦いが終わつたらダンさんは元の世界に帰るんですか？」

「ん？ どうだろ？ もしかしたら帰れずじまいといつて居るかも知れない。」

「もし、良かつたら、私が魔法少女になるための願いを……『ダンさんが元の世界に帰れますように』ってお願ひにします」

「いいのか？ 願いは自分のために使つたほうが……」

「はい、でも、やっぱり自分がいるべき場所に帰れたほうがいいと思つて……」

「そつか、ありがとうな。まどか

「人がそんな事を話している内に、マリヒルやかは魔女の反応を感じた。

四人が近くの路地裏に入った瞬間、魔女の結界に入り込んだ。そこには子供の落書きのような魔女が飛んでいた。

「マリヒルさん。これは私に任せください」

「あら、自信満々ね。いいわ、任せるわ

さやかはマントから何本もの剣を取り出し、魔女に向かって放つ。

魔女は必死に逃げ出した。そしてさやかが放った剣の一本が魔女に突き刺さろうとした瞬間、何かが妨害し、魔女に逃げられた。

「えつ、」

「今の武器は……」

「全く、使い魔なんて倒しても意味が無いのに、」

ダンたちの前に現れたのは、ダンが以前出会った少女だった。

「お前は……」

「ん？ ああ、あの時の……それにマミもいるのか。」

「久しぶりね。杏子」

「知り合いなのか？」

「ええ、彼女は佐倉杏子。私達と同じ魔法少女よ。魔女退治でちょっと知り合ったんだけど……杏子、あなたも変わらないわね。」

「お前もその甘い考え方……相変わらずだな。まあ、今回はアンタと戦うつもりはないけど……」

杏子はそう言って、紅い結界を張り、さやかだけを閉じ込めた。

「その馬鹿な新入りを倒そうと思つてね。」

杏子はさやかに襲いかかった。それを見たキュウベえは……

「はじまるね、魔法少女同士の戦い……！」

「じりじり止めないのをやうべえ、これじゃあただの殺し合いだよ」

キコウベエはなんともいかのよつに答えた

「じつしてだい？ 彼女たちがいつ誰かに戦つているんだ。」

ややかは杏子に向かつて「じりじり止める。だが杏子は艦でややかの攻撃を弾き、吹き飛ばした。

「全く弱いくせにこゝきがつて、やうじう」とは教えてなかつたの？ マハ。強い奴にあつたら戦わずには逃げろつて」

「私たちは協力するべきよ。杏子。こんなこと無駄なだけ」

「へえ、皿ひじやん。」

ややかが立ち上がり、再度杏子に向かつていた。それを見たダンは……

「まぢこ、ややかのやつ。頭に血が上つてるマハ、結界を破るから、あの一人を止めてくれ

「分かったわ。」

ダンはテックから一枚のカードを引いた。そのカードは……

「お前も力を貸してくれるか。駆け上がれ、神の名を持つ赤き龍！」

太陽神龍ライジング・アポロドラゴン召喚…

太陽の光が路地裏を照らすと、そこから赤い龍が現れた。それはダンが持つエースカードの一つ、ライジング・アポロドラゴンだった。ライジング・アポロドラゴンは杏子が張った結界に突進をし、いとも簡単に結界を破壊した。そして結界が破壊されたと同時にマミが戦っている一人を黄色いリボンで縛り上げた。

「『めんなさい』。これ以上こんな戦いを続けるようだつたら……今縛っているリボンを……きつくするわ。」

マミは戦っている一人に脅しをかけた。するとさやかは持っていた剣を落とした。

「『めんなさい』。マミさん」

さやかが謝るヒマミは微笑み、さやかを解放した。そして……

「あなたはビックルの？」

「ちつ…ちすがにマミと馬神ダンが加わつたら勝ち目がない」

杏子はそう言つて、槍を閉まい、ダンに話しかけた。

「今日はそここの新入りがどんな感じか見に来たのと、馬神ダン。あんたに確かめて欲しいものがあるんだ。」

杏子はそう言つて、一枚のカードをダンたちに見せた。そのカードは黒いフードを被り、赤い腕に鋭く尖つた爪を持つスピリットの力

ードだった。

「『れは……魔界七将ベルドゴール！杏子、『れ、『じで……』

「前にあんたと会った後にどつかの魔女と戦った時にグリーフシードとこれを落としていった。あんたが使ってるカードに似てるから一応拾つといったんだけど……」

「でも、何で……」

ダンがそう言つた瞬間、『テッキの中からクリアが現れた。

『見せて、ダン。』

「ダンさん。彼女は？」

クリアを見て、驚くマニ達。ダンはクリアの事を話した。

「元魔女だったんだけど、コイツを縛っていたものを倒した時に俺のスピリットとしているんだけど……それよりクリア、何か分かるか？」

『うん、このカードもダーク・ヴルムと同じように来て魔女が取り込んだものみたいだけど……』

「まあ、直ぐに分からぬみたいだからあたしは帰るよ。あと新入り、次会ったときにはその甘い考えを捨てる事だね。」

杏子はそう言い残して、どこかへ立ち去った。さやかは杏子が消えた方をじっと睨むのであった。

一方ダンたちがいる路地裏を上から眺めているほむらがいた。

「どうやら時間を渡り歩いた結果、馬神ダンが来た。でも、それと同時にワルブルギスも新たに力を身につけ、7体の魔女を従えたみたい。一体は佐倉杏子が倒し、もう一体はすでに私が倒した。残りは五体……」

ほむらの周りに緑色の蝶が一匹飛び回った。ほむらはその蝶に呟いた。

「分かっているわ。このカードは全て揃えて彼に渡すわ。あなた達との約束……忘れないわ。……せ、……っ」

ほむらは一枚のカードを見つめながらまどかを見た。

「あとひと、今度こそ……」

第9話 再会の魔法少女（後書き）

だんだんと明かされていく謎と深まる謎でした。魔界七将はワルプルギスとの戦い前に何体か出す予定です。ワルプルギス戦では異界王のあの最強カードと魔界七将を束ねるスピリットを出すつもりです。

第10話 明らかとなる真実（前書き）

今回でやっと折り返し地点に入ったと思こます。今回は原作の6話くらいになります。

第10話 明らかになる真実

杏子と再会した日の翌日、ダンは一人街を歩いていた。

（何故、魔女がバトルスピのカードを持っていたんだ。）

ダンは昨日、杏子から受け取ったカードのことを考えていた。まだやさやから聞いた話ではこの世界には存在しない。だが、クリアの話では何らかの影響でバトルスピリッシュのカードがこの世界にあるらしい。

（ダーク・ヴルム。それに魔界七将…………いずれも魔女が関わってる…………一体この世界で何が起きようとしてるんだ？）

ダンはそう思いながら歩いていると、ほむらがゲームセンターに入る姿を発見した。

「ほむら? あいつ……」

ダンはほむらのことが気になり、後を追つた。

ゲームセンターに入り、ほむらの姿を探すとそこにはほむらとゲームをしている杏子がいた。二人は何かを話しており、ダンは一人の話を聞き入った

『はじめまして、とこうべきかしりっ.』

『ん？ああ、昨日あたし達の様子を伺つてたやつか』

『氣づいていたのね。』

『それで何の用だ？』

『この街を貴方と巴マリ。そして馬神ダンに任せたいの』

『ふうん、どうこう風の吹き回しつ.』

『美樹さやかじゅ、務まらないわ。貴方みたいな子がふさわしいわ』

『ま、そのつもりだけどね…。それで、さやかつてやつどうすんの』

10°

『私が何とかするわ。だから貴方は何もしないで』

(なぜかをどうある氣だ？)

『やついえば、肝心なこと聞いてなかつた。あんた何者だ？』

『……この街に2週間後、ワルブルギスの夜が来る』

『なぜわかる……？』

『そいつを倒せば、私はこの街を出る。でも一人では……』

『なんなら、あたしも協力しようつか? マリとダンが協力すりや何とかなるだろ!』

『せうしてもらうと嬉しいわ。それともしも魔女と戦つた時にグリーフシードと一緒にカードが落ちていたら私に届けて……』

『カード? 何かあるのか?』

『ええ、少しね』

ほむらはそのまま去つていつた。ダンはむづきの会話を聞いてあることに気がついていた。

(ほむり……アイツ……スペコシトを集めてどうするつもつだ?)

その頃、セセカとセヌイベは昨日格子と出合った場所に来ていた。

「 もう他に魔女の気配はないね…」

「 ネバ…」

するとまどかが来た。

「 ねえ、セセカちゃん…。このまま魔女退治続けてたら、昨日の子と会つけやしないの…?」

「 まあ、当然そうなるだろ?」

「 だったら、先に会つてお互に話しあうすれば…、そしたら昨日みたいな喧嘩に…」

「 喧嘩ねえ…。タベのあれがまどかにとつて喧嘩に見えたの?あれは正真正銘殺し合いでよ。お互になめてかかつてきたのは最初だけ。途中からあたしもアイツも相手を終わらせようとした。」

「 そんなのなおれり黙田だよ…」

「 だからつて話しあうつて?バカいわいで相手はグリーフシード欲しさに人間をえぞにしきつとしてるやつなんだよー。じつやつて折り合いつかうつて並いつの?」

「 せやかちやんは魔女をやつつけるために魔法少女になつたんでしょ?あの子は魔女じやない、同じ魔法少女なんだよ。魔女を退治し

たこと思つ氣持ちは同じでしょ？ほむりひやんも…」

「そんなわけない！まどかも見てたでしょ？アイツはグリー・フシードが欲しいから、人間なんてどうでもこいつて思つてるんだよ！」

「そんなの…ちがうよ…」

「あの転校生も昨日の杏子つてやつも自分の都合しか考えてない！…今ならわかるよ。ママさんやダンさんたちだけが特別なんだ。他の魔法少女だつて誰あんなやつらばかりだよ…」

「そんな…」

「次に魔女が狙うのは…まどかのママやパパ、タツ君かもしないんだよ！…あたしはただ魔女と戦うだけではなく、大切な人を守るためにこの力を望んだの。そんなひどい人間がいたら、あたしは戦うよ！…たとえそれが魔法少女でも…」

そういつてさやかはどうかへ行つた。そしてまどかは泣きながらもキュウべえに説得しようと言つた。

「キュウべえも何とかいつてよ…」

「僕から言わせておけば、無謀すぎる」とだけだよ。今のさやかじや暁美ほむらにも佐倉杏子にも勝てない。でもさやかは聞き入れてくれないよ…」

「でも、ほむりひやんはマリア姫を助けてくれたーきっとさやかちゃんもほむりひやんの事情を知れば……」

「彼女がその事情とかを話すとは思えなによ。」

キュウベエはさつ言つて涙を洟すのであつた。

そんなこんなで翌日。さやかは今日も病院に行き、恭介のお見舞いに来ていた。しかし、部屋に行くと誰もいなかつた。

「あら、上條さんなら退院しましたよ」

通りかかった看護婦が言つた。その夜、さやかは恭介の家の前に来た。インターホンと鳴らそうとした時、バイオリンの音がした。

「あ……」

きっともう大丈夫だわ……。そう思つて鳴らさうとはしなかつた。帰ろうと思ひ、さやかが向いた先にお菓子を食べている杏子がいた。

「よお、会にもしないで帰るのかよ。知つてるよ、この家、坊やの家なんだろ？ まったく、くつだらねえことで願いを使いやがつて……」

「あんたねえ、」

「惚れた男をモノにするなりもつといこ手があるじゃん？折角手に入れた魔法でさ。もう一回再起不能にしちまえばいいのさ。なんなら、あたしが坊やをやるつか？そつすれば坊やの身や心は全部あんたのものになるんだし」

「あんただけは絶対に許さない……！」

「場所を変えよつぜ。ここじゃ人間につく」

その頃、まぢかは家で勉強をしてこるとこ…

(まぢか、まぢかー)

窓の方を見るとキュウベえがいた。

(急いで…さやかが危ない。もつマリマリ伝えたから……今すぐダンと共に来てくれ！もしかすると君の力が必要かもしれない。)

まどかは急いで着替えて、部屋でテックの調整を行つてゐるダンに声をかけた。

「ダンさん。さやかちゃんが危ないって……キュウベエが……」

「さやかがー?まさか……」

ダンはゲームセンターでの会話を思い出していた。まさかほむらがさやかに何かをするつもりじゃないかと……

「急いで向かうぞー!」

ダンとまどかは外に出て人が少ない場所に来た。そして……

「太陽神龍ライジング・アポロドーラゴン召喚ー!まどか、背中に乗つてくれ!」

「は、はい」

ダンとまどかの二人はライジング・アポロドーラゴンの背に乗り、さやかの所へと向かうのであった。そしてある歩道橋の上にたどり着いた。

ダンはマミと合流するために、まどかを行かせた。さやかも魔法少女に変身しようとするその時、まどかとキュウベエがやってき

た。

「待つてー。せやかちやんー。」

「まどか……邪魔しないでー。これはあたしたちの戦いだからー。」

「ふん、つやこやつはひこ仲間がいるもんだね。」

「なら、あなたの仲間はどうかしひへ。」

杏子の後ろに立むひがいた。

「アイシは…」

「話が違つわ。美樹をやかに手をださないでと」

「あなたのやり方が手ぬるすぎただよ」

「なら、私が何とかする」

「ふん、こいつが命に終わるまでは止めやる」

「十分よ」

「せやかちやん、『めん』

せやかは変身しようとした瞬間まどかがせやかのソウルジムを奪い、歩道橋の下に落とした。するとほむりは何かに反応したかのように泣えた。

「なんだ？自分から逃げたわ……」

「おじか、あんたなんていとを……」

「だつていわしないと… わやかわやん？」

おじかが言いかけた瞬間、わやかは倒れこんでしまった。

「お… おこへわやか…」

「わやかわやん？」

「今のはわかつたよ。友達をまおりなげるなんてどうかしちゃる

「なに？なんなの…？」

杏子はわやかを掴み取った。

「… どうなってんだ？ ブレイブ死んでるわ」

「なにー？」

「えー？」

杏子の言葉を吸け、遅れてきたダンたちも驚いていた。

「お… おこへわやか、嘘だらー…」

「わやかわやん…」

「一体…“ひなつてるんだ…？”

「おこ…キュウベー！ 一体ひなつてるんだ…セやかが死ぬなんて…！」

杏子はキュウベーを睨みながら言いつゞ、キュウベーは無表情で語つた。

「はあ、それはただの抜け殻だよ」

「抜け殻…！？ どういう意味だよ！？」

「セやかは今、まじかがほおりなげたじやない」

「ほおりなげた…ってソウルジムの」とか？」「

「セやか、普段は肌身離さず持っているから…」 う事故はめったに無いんだけどね。壊れやすい体で魔女と戦ってくれなんてとてもお願いできないよ。君たち魔法少女にとって体は底付けのハードウェアしかないんだ。君たちの本体の魂は魔力を公立できるコンパクトなソウルジムなんだ。僕の役目はね、君たちの魂をぬきとつてソウルジムに変えることさ」

「てめえは…なんてことを…ふざけんじゃねえ！ それじゃあ、あたしたちゾンビにされたよつなもんじゃねえか！」

「むしろ便利だろ？ どんなに体が引き去れようが魔法で治せばソウルジムが碎かれない限り、君たちは無敵だよ」

「なんで最初から言わなかつたんだよ…？」

「聞かれなかつたからさ」

「そんな重要なことは先に言つとくべきだらう。」

「はあ、君たちはそり、どうして命のありかたにこだわるのさ、わけがわからないよ」

「ぐぐ…一でめえ！」

ダンはキュウベヒの話を聞いて、まどか達と違つてあまり驚いていなかつたマリに話しかけた。

「マリ、お前は知つてたのか？」

「ええ、」の間、暁美さんに助けてもらつと時にね。教えてもらつたわ。さすがに聞いたときはショックだつたけど……私の場合は仕方なかつたかもしれない……」

マリは悲しそうに笑つた。ダンはそつとソウルジョムが消えた先を見つめた。

その時、ほむらが戻つてきて、セヤカのソウルジョムをセヤカの手元に戻した。

「あ……！」

すると、セヤカは起き上がり、あたりを見回すと一体何があきたのかわからぬ状態だった。

「ねえ、なんなの？」

第10話 明らかになる真実（後書き）

そろそろセセセやかが魔文化しますが……どうせひっせりて救出されるか考えていますが……ちょっと無理やり過ぎる感じがしますが、とりあえずさやかの魔女との戦いで十一面×レアを何体か登場させます。クリアも活躍します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6818w/>

魔法少女まどか マギカブレイヴ

2012年1月8日22時50分発行